



日程は、2022年11月3日（木）に羽田空港を出発し、
約9時間のフライトを経て同日サンフランシスコ国際空港に到着。
翌日（金）に受付し、11月5日（土）の朝5時にスタート。
そのままレース中に夜を明かし、11月6日（日）の午前中にゴール予定。
そして、その日のうちにサンフランシスコへと戻り、翌日夜の便で出国。
日本には11月9日（水）の朝に到着するというなかなかハードなスケジュール。

11月の羽田空港は日本がようやく“開国”したこともあり活気を取り戻しつつあった。
チェックインではコロナのために提出しなければならない書類も見せることなく、
航空会社のスタッフがワクチンアプリをチェックするのみで拍子抜けした。



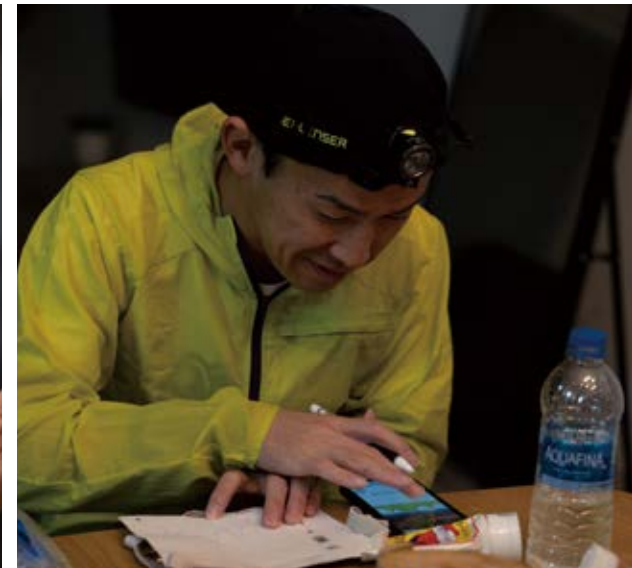


宿に戻り、明日に向けてパッキングを始める。
海外のレースにみんなで行くのなら一軒家や、
コンドミニアムタイプを借りるのが
断然楽しいし、気持ちが楽になる。
疲れたら部屋に戻れば良いし、飲みたいならリビングに行けばいい。

「さて、初めての100マイル、一体何を持つのが正解なのだろうか」
1人じゃ不安だったので、自分のスーツケースを
部屋からみんなの集まるリビングまで持っていき、
全て広げるところからスタート。
私が荷物を広げる前に3人はすでに準備は終えていた。



スタートの朝、午前3時にかけたアラームよりだいぶ前に目が覚めてしまった。
ベッドの中で必死に目を閉じ、眠ろうと思っても全く眠れず、諦めて2時には起き出すことにする。
寝られたのは2、3時間程度しかなく、不安になるけれど、それはみんな一緒だった。
4人全員がその程度しか眠れず、ここにきて全員時差ボケが発動しているよう。
ただの時差ボケだけではなく、緊張、興奮もある中だったので、
ダルさはなく、頭はわりとスッキリ。
起きて早々にお腹が空いていたのもかなり良い事だと思う。
シンゴちゃんの背中に貼るニューハレを
コバさんと王子がわざとずらして貼って大爆笑していたり、朝から相当にぎやか。



時刻は21時過ぎ、スタートから16時間が経過していた。
止む気配もない雨も、スリッピーになりつつあるトレイルも、
下がりだす気温も、あきらかに状況は悪くなってきてはいるけれど、
Auburn Lakes Trailエイドを出れば往路のコースとは違えど、折返しなのだ。

これまでの私の最長距離は2010年に走ったONTAKE100の105キロだったのだけれど、
(前日の雨で5キロ伸びた)再長距離に到達した記念でコバさんが時計の写真を撮ってくれた。
ここから先は完全に未知の世界。
12年前の私は何度も泣き、二度とトレイルランニングは走らないと誓った。
その私が12年の時を経て、100マイルに挑戦している。
人生再長距離を越えた私は、あの時のように泣いてはおらず、
「漆よけゲーム」を楽しんでいたり、スルメを食べたりと随分と成長を遂げていた。

ここまで来たらあとほんの60キロ、私はまだまだ楽しんで走ってられそうだ。
そんな中、コバさんがなんだか眠そうで、膝と腰が痛むらしい。
これまでコバさんは前を引っ張ってきてくれていたから、
何も考えず楽しんで走っている私よりもだいぶ気を使って走ってくれていたのだろう。
コバさんは何度も100マイルを完走しているし、100マイルに慣れていると思い、
私はこれまで付いていくだけで何も思いついていないことによりやく気付いた。
100キロ以上も私を絶対にゴールさせるためと思って走ってくれていたのに、
私はただうしろを走っていただけだからそりゃあ楽だ。
少し先頭を交代し、私が前を走ることにする。
コバさんは眠そうで痛そうだが、試行錯誤をしながらも絶対に歩みは止めないし、
弱音も一切吐かない。
想定外の出来事でも想定内に納める。
「これが何度も100マイルを完走してきた凄さなんだ」と思った。





港から少し離れた場所にあるアメリカの高級スーパー『Trader Joe's』に行くことに。
途中、路面電車のUターン地点に遭遇。
サンフランシスコの物価は高く、
日本の平均給料の2倍ももらったとしても市内には住めないという。
そんな街なのにUターン作業は大柄なおじさん2人が必死で動かすという
昔ながらの人力で行われていた。
時代は変わっても変わらないものも残されている街サンフランシスコ。
Trader Joe'sでは頑丈な紙で出来たショップバックを購入。
そういえばこれがこの旅初めての自分への買い物だった。

